
目指せ！ウハウハ家族計画

ジャージ男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目指せ！ウハウハ家族計画

【Nコード】

N69740

【作者名】

ジャージ男

【あらすじ】

家族が欲しい。ただそれだけ、そんな少年のお話

ああ、家族が、欲しいなあ。
(前書き)

初投稿です。

よろしく願います。

感想待ってます。

ああ、家族が、欲しいなあ。

家族。それはすばらしいものだ。暖かく、安心できる場所だと、昔誰かに言われた覚えがある。まあ俺には二年前より前の記憶がないのだけれど。

まあ俺のことはどうでもいい。今は家族についての話だ。俺には家族がいらないらしい。一応保護者みたいな人はいるんだが。

そんなわけで、俺は家族に憧れていたりするわけだ。記憶もなく家族もいない。胸に穴が開いているような感覚なのだ。

家族を作るにはどうすればいいのだろう。そう考えた俺は保護者の家族を観察してみることにした。

保護者、この言い方めんどくさいな。詠春さんでいいや。詠春さんの家族はお金持ちである。京都のでっかい山の上にお屋敷があるのだから。使用人もたくさんいるし。家族構成は詠春さん、奥さん、娘のこのか、後はあったことはないがじーさんばーさんがいるらしい。

このかは今、魔帆良の小等部に通っている。記憶があった頃とて
も仲がよかったそう。今は忘れてしまっているんだけど……。

まあ、とにかく気づいたんだ俺は。家族を作るには大事な要素があることに。

そう、奥さん！である。

だから俺は今日プロポーズをする。そう決心したのだ。

相手は使用人の小雪お姉さんだ。この人は俺を気味悪がないで見てくれた。俺にやさしいし。そんな人はここに来てから数人しかないから、とてもうれしかったのだ。

そしてもうすぐ待ち合わせ場所の屋敷の裏の木の下にたどり着く。

足を一步踏み出す。鼓動が高鳴る。

足をもう一度踏み出す。手に汗がにじむ。

小雪ねーさんの姿が見えた。顔が赤くなる。

ついにねーさんの前にたどり着いた。

やべえねーさんいつ見てもきれいだな。奥さんになってくれたらチョーうれしいけど。うまくいくのかな。あ、足が震えてきやがった。落ち着け俺！まずは挨拶からだ。

「ねーさんごめん急に呼び出して。」

「あ、いいのよ気にしてないから。」

髪をいじりながらねーさんが答えた。もうだめだ。可愛すぎて理性が、理性がー！

「私も話があっただし。」

「話？じゃあねーさんから話して、俺の話は後でいいから。」

ねーさんはなかなか話をしようとしなない。伏目がちになり顔から表情は読み取れない。なにやら困っているようだ。でもやがて決意をしたのかこちらまっすぐ見て言葉を紡いだ。

「もう私に近づかないでくれるかな。」

それは、俺そのものを拒絶する言葉だった。

「周りの子たちがさ、君の事を化け物って呼んでるんだ。近づく
と不幸になるって。ここ陰陽術とかの総本山じゃん、専門家が言っ
てるからうそとも思えないし。最近私も化け物に優しくしてるとか、
言われ始めたんだよ。だからもう、近づかないで。」

最初は弱弱しい感じでしゃべっていたが最後にはまくし立てるよ
うに話すとすぐに走り去ってしまった。

また胸に穴が開いている感じがした。所詮家族がないものに家
族は作れないのだろうか。

「ああ、家族、ほしいなあ。」

無意識に出た言葉はなぜか震えていた。空に広がる青もにじんで
見えた。

俺って何なんだろうな。俺が振られたのにムカつくぐらい笑って
る太陽にそんなことを、訊いていた。

もちろん返事は、暑い日差しだけだった。

君って奴は、鈍感だよな。byコウキ

「コウキ、まだぶだでだあ。」

「うお、鼻水を俺につけないで汚いから。何をいつてるのかもわかんないから落ち着いて、話なら聞くから。」

コウキにそう言われ少し落ち着いた。

「コウキ、また振られた。」

そついうとあきれたような顔をして言った。

「君って本当に惚れやすいよね。」

「違う、愛が俺の体からあふれてるだけだ。」

「いや、意味わかんないから。」

「ああ、俺もよくわからん。」

ため息をつかれた。またあきれたようだ。

「振られた理由は？また前と同じ感じ？」

「そうだ。俺は化け物なんだそうだ。」

体に包帯ぐるぐる巻きで眼帯をしているぐらいで化け物なわけがないし。本当に意味がわからん。

「やつぱさ、詠春さんに聞いてみたら？」

「いや、でもいま詠春さんどっかに出かけてるぜ。」

「じゃあ、君の師匠に聞いてみたら？これから修行の時間なんだから。」

「そうしてみるか。」

やはりコウキは頼りになる。記憶がなくなつてからの親友だから気兼ねなく相談できるぜ。

「なんだ、ユウこんなところにいたのか。また振られたんだって？」

笑いながら俺の古傷を削ってきたやつがいた。こいつはマナ、俺とコウキが紛争地帯に一人でいたところを保護した。それ以来ずっと一緒に行動している。

こいつは俺のことが嫌いみたいだ。やけに俺のこと弄ってくるし。

「うるさいな。おまえにや関係ないつしよ。」

そうするとムっとした顔をしてこっちを睨み付けてきた。

「結構なお言葉だなユウ、私は君を元氣付けにきたんだぞ。そういう態度をとるならもういいさ。」

そういつて去っていた。よくわからん奴である。昔はユウおにー

ちゃん、と良く引っ付いてきたのだが。時の流れとは残酷なものだなあ。うん。

「君って奴は、鈍感だよな。」

呆れながらもコウキは笑っていた。何でだろうか？

コウキへの相談も終わったので道場へと向かうことにした。

歩いていると周りから殺気を感じた。

咄嗟に振り返ると刹那がいた。目を合わせるとソップをむいてどこかにいってしまった。

彼女には恨まれているようである。俺が何かしたのだろうか。

まあ、とりあえずこの生活はなかなか厳しいものである。

未来は明るいことであるのを願うばかりだ。割と切実に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6974o/>

目指せ！ウハウ八家族計画

2010年11月12日21時52分発行